

言い表わせないほどの賜物

2006. 12. 19 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

ルカの福音書 1章26節から56節

ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た。この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった。御使いは、はいって来ると、マリヤに言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと考え込んだ。すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」そこで、マリヤは御使いに言った。「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」御使いは答えて言った。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。神にとって不可能なことは一つもありません。」マリヤは言った。「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」こうして御使いは彼女から去って行った。そのころ、マリヤは立って、山地にあるユダの町に急いだ。そしてザカリヤの家に行き、エリサベツにあいさつした。エリサベツがマリヤのあいさつを聞いたとき、子が胎内でおどり、エリサベツは聖霊に満たされた。そして大声をあげて言った。「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています。私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう。ほんとうに、あなたのあいさつの声が私の耳にはいったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。」マリヤは言った。「わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたっておよびます。主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもベイスラエルをお助けになりました。私たちの先祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。」マリヤは三か月

ほどエリサベツと暮らして、家に帰った。

天の使いが、マリヤに向かって、「おめでとう」と言われたのです。どうしてかと言いますと、「主はあなたとともにおられるからです」。「主はともにおられる」と確信していたからです。このように言える人こそ、幸せなのではないでしょうか。

結果として、このマリヤは、主に用いられたのです。どうしてかと言いますと、用いてもらいたいと切に望んだからです。そして、彼女の心構えはどういうものであったかと言いますと、「私は、単なる卑しいはしためにすぎません。みことばどおりになりますように」と。

ヨセフは彼女が妊娠していることが分かったとき、考えられないほど苦しみ、悩み悲しんで、落胆したことでしょう。自分がそれを公にすると、彼女はただちに石で殺されます。結婚をしないで子どもを産むことは、許されていなかったのです。けれど、一つの方法もあったのです。それは、そのことを公にせず、黙って、自分が彼女から離れれば、彼女はその子どもの男と結婚することができる、心の中でそのように決めたのです。

しかし天の使いは、「ヨセフ、ちょっとそれは違います。マリヤには別の男はいません。彼女こそ、卑しいはしためとして、何千年も前から救い主を生むために選ばれた者です。安心して彼女と結婚しなさい」と。

イエス様がお生まれになるまで、二人は親しい関係をもっていなかったのです。後に、男の子が少なくとも四人、女の子も二人生まれたのです。聖書に、四人の弟たちの名前ははっきり出ています。また、「女たち」と複数になっていますから、妹は少なくとも二人なのです。

「おめでとう」と言われたのは、「あなたは主に愛されているからです」ということです。「主に愛されている」とは、理性ではつかめない事実ですが、最も素晴らしい奇蹟ではないでしょうか。どうして愛されているのか。それは分かりません。

ヨハネの福音書 3章16節

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

ローマ人への手紙 8章32節

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましよう。

イエス様の偉大さ素晴らしさは、人間が理解できませんし、考えることもできません。しかし私たち人間は、みな考えられないほど愛されているのです。言い表わせないほどの「賜物」であるイエス様こそ、その証拠であられるのです。

イエス様はどうして私たちのために天のみ国から遣わされたのか、について考えるべきです。

すなわち、「救いを与えるため」です。「救い主となられるため」です。どうしようもない人間に、変わらない喜びを、死に臨んで心に平安を、また生きる希望を、与えるためにです。イエス様は罪人を招くために、失われた人々を尋ね出して救うために来られました。

もう一箇所読みましょう。

マタイの福音書 1章18節、19節前半

イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。夫のヨセフは正しい人であって、…

「正しい人はひとりもない」と、聖書は語っているのです。(笑) ヨセフも、生まれつきの正しい人ではなかったのです。私たちと似た者でした。わがままだったのですが、彼は悔い改めることができる恵みにあずかるようになり、良しとされ、義と認められたのです。

マタイの福音書 1章19節から21節

ヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現われて言った。「ダビデの子ヨセフ。恐れないうちであなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」

聖書には、「この方こそ新しい教えを教えてください」と書いてはありません。「罪から救ってくださるお方」なのです。

罪から救い出されるということについて、パウロは、「ことばに言い表わせないほどの賜物のゆえに、神に感謝する」と言ったのです。この主の、「言い尽くせない賜物」の大切な名前は、「インマヌエル」です。「インマヌエル」とは、「神我らとともにいます」ということを意味します。

しかし、生まれながらの人は、主なる神との交わりを全く持っていません。これこそ、恐ろしい事実です。

生きておられる唯一の主なる神が、なぜ人間を創造されたかと言いますと、主の栄光をほめたたえるためにお造りになりました。

そしてこの最初の間は、言うまでもなく「完全」でした。この世界の九十九パーセント以上の人たちは、それを否定しています。「最初の間は動物に似たようなものだった」と。何億年もかかって立派になったのだそうです。この立派なる人間について、最近テレビを見ても、新聞を読んでも、たくさん書いてあります。結局、人間は考えられないほど盲目にされています。

神が創造された最初の間は、今のようなものではなかったのです。毎日、創造主と話し合ったり、交わったりすることができたのです。この地上でしたが、天国のようなものでした。罪も無かつたし、苦しみも無く、痛みも無くて、パラダイスのようなものであつ

たに違いありません。言うまでもなく、この最初の人間は「完全」でした。

どうして分かるのか、と聞く人がいるかもしれません。完全なる神が、不完全なものをお造りになれないからです。ですから、最初の人間の寿命は、例外なく九百何十歳位まであったのでした。S兄の話によると、九十歳から年配になるのだそうです。(笑) アダムは九百三十歳位になり、メトシェラは九百六十九歳位になるでしょう。将来の千年王国になると、人間はまた九百歳になる可能性が十分あるのではないのでしょうか。

最初の人間は、大学教授よりも頭が良かったと思います。その証拠は、すべての動物に的確な名前を付けることができたからです。置かれている環境も、やはり素晴らしい環境でした。毎日創造主と一緒に交わることは…。

神の御目的は「人間とともに住みたい」「人間と親しい交わりを持ちたい」。そういう御目的でした。私たち人間が造られた目的は、もちろん「主の愛に応えるため」でもありました。そしてアダムとエバに、永遠のいのちを持ち続けていてもらいたかったのです。

しかし二人には、創造された、造られたいのちしかなかったのです。けれど、造られたいのちであっても、終わりのないいのちです。それでも主は満足なさいません。アダムとエバには、造られたいのちではなく、永遠のいのちを持っていてもらいたかったのです。

もし、アダムとエバが園の中央にある「いのちの木の実」を食べたならば、その時永遠のいのちを持つようになりました。けれども、悪魔に惑わされて、取ってはいけない木の実を取って食べたのです。主にお聞きして、「主よ、主よ。悪魔がこのように言いましたが、どうしましょうか。分かりません。教えてください」という態度をとったなら、もちろん守られたのです。祈らないで事をなそうとすることは、考えられないほど恐ろしいことです。人間は自分勝手に行動すると、主からの祝福をいただくことはできません。もうおしまいです。

人間は、「いのちの木の実」を食べようとせず、恵みの提供を退けて、悪魔の誘惑によって、わざわざとなる選択をしてしまったのです。その結果は、いったいどのようなものだったのでしょうか。

人間と主なる神との交わりは、断ち切られました。エデンの園から追放されてしまったのです。結局、私たち人間といのちの泉である主との結び付きが断ち切られたのです。

以前は確かに信仰と愛の交わりがありましたが、今は恐怖と地上での交わりになってしまったのです。人間のわがままによって、悪魔との結び付きが生まれたのです。人間は悪魔の権力の下に入れられてしまったのです。悪魔は、今や人間を合法的に支配するようになりました。悪魔は喜んでいたでしょう。「おれは勝った。神のみこころは駄目になった。人間は自分の奴隷になった」と。

自分勝手な行動によって、人間は主なる神から離れ、暗やみに入りました。人間の精神は、主なる神に対して盲目となり、死んだものになってしまったのです。

聖書の言っている「死」とは、いわゆる肉体的な死よりも、「霊的な死」を問題にしているのです。人間のわがままによって、人間の霊と主なる神の霊は分かれたのです。ですから人間の霊は、主なる神の導きにもはや応じようとしなくなってしまったのです。人間の霊は、主なる神に対して死んだものになりました。

この状態について、パウロはエペソ書の第2章で、次のように書き記したのです。
エペソ人への手紙 2章1節から3節

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。

「かつて私はこういう者であった」とパウロは言ったのです。

創造主から離れるということは、「霊的な死」を意味します。人間の墮罪の一番大きな結果は、「霊的な死」でした。なぜなら、新しく生まれ変わらなければ、創造主との交わりは不可能となります。もちろん、主は人間にはっきりと注意なされたのです。創世記2章17節を見ると書かれています。

創世記 2章17節

「しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」

3章を読むと分かります。人間は、「禁じられている実」を取って食べてしまったのです。ですから死んだのではなく、もちろん後にも、肉体的にもたましいも生きていました。けれど、霊的には死にました。主との交わりは、不可能になってしまったのです。

「霊的な死」とは、いったいどういうもののでしょうか。例えば人間の目は、目の前にあるものを見るために備えられています。しかし、この目の視神経が急に麻痺すれば、目があっても何も見えなくなります。天気が良くても、景色が素晴らしくても、何も見えません。目が死んだものになったからです。耳しいの耳も同じでしょう。人が話しても、鳥が美しい声でさえずっても、素晴らしいオーケストラの演奏を聴いても、全く聞こえません。「罪の耳」は、あらゆる事がらに対して死んでいます。

人間が主に頼らずに行動したとき、霊的に死にました。人間は、霊によって主なる神を認め、主との交わりを持っていましたが、霊的に死んだのです。人間は、主との交わりがなくなりました。しかし、人間はなおも霊は持ち続けていましたが、「主の霊」、「いのちの泉」から離れてしまったので、その霊はいのちを持ってはいませんでした。(死んだものなのです。)

確かに、目しいは目を持っていますが、その目は見えません。同様に、死んだ人間の霊は、神を認めることができないのです。それが、「霊的な死」です。

人間の霊は、主なる神から離れると死んでしまいます。これこそ、「霊的な死」です。

人間がイエス様との出会いによって新しく生まれるなら、生きるのです。

昨日もここ吉祥寺キリスト集会で、H兄弟の葬儀がありました。彼は何ヶ月か前までは、主なる神に対して全く盲目でした。けれど、イエス様の話を聞いたとき、どういう気持ちになったのか分かりませんが、「やはり永遠のいのちが欲しい。必要なのはそれだ！」と。彼は素直に祈るようになり、心配から解放されたのです。以前に見舞いに行ったとき、「私の葬儀をよろしくお願いします。納骨式も御代田でしていただきたい」と。「本当は御代田で洗礼を受けたかったのだけれど、せめて納骨式だけでも御代田でしていただきたい」と。

(いろいろな問題があったのです。) 本当に集会でできるかどうかと悩んだり、心配したりして祈り続けた人は沢山いました。どうしてそれが可能になったかは分かりません。集会の人たちは、彼のことにについて短期間だったためよく知らなかったのですが…。

昨日の葬儀は、沢山の方がたが参列されました。みんな未信者です。しかし彼らは、私たちより彼のことをよく知っていたはずです。ですから、彼がこのように変えられたのは、考えられない奇蹟でした。彼は奥さんに言ったのです。「人生のこの最後の何週間は、一番幸せだった！」と。これこそ素晴らしい証しではないでしょうか。

けれども、主に出会った人たちの中に、「霊的に死んでいる」人もいます。この「霊的に死んでいる」人たちについて、パウロは次のように書きました。コリント第一の手紙に「生まれながらの人は、主の御霊の賜物を受け入れない」とあります。

コリント人への手紙・第一 2章14節

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。

とあります。けれど、主はご自分の御子イエス様を遣わすことによって、救いの道を開いてくださったのです。

イエス様が人間となられることは、何百年、何千年も前から、はっきり旧約聖書の中で預言されていたのです。イエス様は、天地創造の前に、一つの珍しい名前を持っておられました。「神の小羊」。つまり、「人間の代わりに犠牲になられるお方」「人間の罪の問題を解決なさるお方」という意味でした。人間が一人もいなかったとき、すでにイエス様の持っておられた名前でした。

主なる神の人間のわがままに対する答えは、「イエス様の犠牲の死」でした。けれど死ぬために、イエス様はまず人間になられなければならなかったのです。

多くの人たちは、イエス様の誕生について考えます。けれど、なぜ人間の中に来られたのかについて、あまり考えようとしません。

イエス様は、なぜ人間になられなくてはならなかったのかと言いますと、神として死ぬことはおできになれないからです。

イエス様が人間になられることについて、創世記3章に初めて書かれています。創世記1、2章、黙示録21、22章は、聖書の中で一番素晴らしい四章です。罪と関係のない

章です。けれど、創世記3章から問題が始まるのです。黙示録20章までです。3章15節の預言は、次のようなものです。

創世記 3章15節

「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとかみつく。」

このように主なる神は、蛇、すなわち、悪魔に言われました。この女から生まれる人は、特に力強い方であることが預言されています。そしてこの方は、「女のすえ」であることもはっきり書いてあります。

一般的に、子どもが生まれる時、いつも男のすえから生まれるとあります。けれども、イエス様の場合、ご自分の誕生のために人間的な父は必要なかったのです。ですから、「女のすえ」と聖書は言っているのです。「女のすえは悪魔のかしらを砕く」と預言されました。この幼子は悪魔に打ち勝つ、とも約束されています。

結局、三つのことをはっきり預言されたのです。

一番目。救い主が女から来る。奇蹟的に生まれる。

二番目。この救い主は、悪魔に打ち勝つようになる。

三番目。救いの代価は、苦しみである。結局、救い主の死である。

とあります。

この預言はもちろん成就されました。イエス様は預言どおり、処女からお生まれになりました。そして十字架で悪魔に打ち勝たれました。そして救いの代価は、「救い主のいのち」でした。

旧約聖書を読むと、イエス様が人間となられることは多く預言されていたのです。旧約聖書の福音書と言われているイザヤ書の中で、一番細かく書かれているのではないかと思います。ちょっと見てみましょう。イザヤ書7章14節です。

イザヤ書 7章14節

「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」

「インマヌエル」とは、前に言いましたように、「救いの神、我らとともにいる」ということを意味します。

ここで、ひとりの人、すなわち主イエス様のうちに、二種類のいのちがあるとあります。「主なる神つまり、我ら人間とともにいます主なる神」は、人間的な外形をとるようになると預言されたのです。

9章で、また次のようにイザヤは預言したのです。

イザヤ書 9章6節、7節

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与え

られる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。

イエス様は、もし普通の人間であられたら、決してこのような名前をもっておられないはずです。

この来たるべき救い主は、どのようにして来られるか、どういうお方であられるか、と聖書が言っているだけではなく、どこでお生まれになるのかもはっきり書き記されているのです。ミカ書5章2節です。東の国の博士たちは、当時の王様であるヘロデのところへ行行って言ったのです。「ユダヤの王がお生まれになります」。「いったいどこか？」しかし、王は聖書を読もうとしなかったでしょう。そして聖書学者たちを呼んで確かめたのです。彼らはみな、「王様、分かっていないのですか、書いてあるでしょう。ベツレヘムです」。みんないっせいに答えたのです。

ミカ書 5章2節

ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。

主イエス様のお生まれになる場所について、はっきりこのように預言されました。もちろん、イエス様の御降誕の何百年も前に書かれたのです。

聖書を読むと、主イエス様は人間的な外形をとった父なる神の御ひとり子であられたことを、だれでも認めざるを得ません。墮落した人類を救うために、主イエス様が人間におなりになることが、どうしても必要だったのです。自由意志をもって、イエス様は墮落した人類を救うために、この地上に来られたのです。ご自分が人間になられることは、本当に考えられない犠牲でした。

確かにクリスマスの時、多くの人たちはイエス様の誕生について考えます。それは良いのですが、クリスマスとは、決してイエス様の始まりではありません。この地上に来られたことでしかなかったのです。

その前（世が造られる前）に、イエス様はもちろん存在しておられたのです。十字架につけられる少し前に、イエス様は祈られたのです。聖書の中に書き残されていますから、弟子たちも聞いたようです。何を祈られたかと言いますと、ヨハネ伝17章5節を読むと、次のように書かれています。

ヨハネの福音書 17章5節

「今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」

世界が存在する前に、イエス様は考えられない栄光を持っておられたのです。

パウロも、同じ事実について、後にコロサイ書1章の中で書いたのです。世が造られる前に、万物よりも先に、イエス様は父のみそばで栄光をお持ちになっておられたと。

コロサイ人への手紙 1章16節

なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。

読むことができますし、信じることができます。けれども、理解することができません。考えられないことです。結局、イエス様によってすべてが創造されたのです。この素晴らしい主イエス様は、自由意志をもって、墮落した人類を救うために地上に来られたのです。

遭わされる以前に、どのようになるのか、おそらくイエス様もはっきりお分かりにならなかったのではないのでしょうか。けれども、大変なことになると感じられたに違いありません。

パウロはこの犠牲について、ピリピ人への手紙2章に、次のように書き記したのです。ピリピ人への手紙 2章6節から8節

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

結局、人間を救うために、イエス様は天国のすべての栄光をお捨てになったのです。イエス様にとって、人間になることとは考えられない犠牲です。

イエス様はお祈りなさる必要がなかったでしょう。人間になられる前には、何でも知っておられましたし、何でもおできになりましたから。ですから、助けをお求めになる必要はありませんでした。人間になることによって、無力者、無能者になられました。イエス様は、「わたしは何もできません」と正直におっしゃったのです。

確かに、福音書を読むと嘘です。何でもお出来になったではありませんか。大嵐に向かって、「黙れ、静まれ」。すると嵐は静まりました。らい病人に向かって、「きよくなれ」と言われると、らい病人はきよくなりました。出来たではありませんか。

けれどイエス様は、「違います。わたしのことを誤解しないでください。わたしは本当に何も出来ない。何もしたくない。わたしは大切ではなく、お父様、みこころを明らかにしてください」と。

イエス様は自分勝手に行動なさったことがありません。(私たちは、自分勝手なことをなさらないイエス様のことが理解できません。何かあれば、イエス様はまず祈られたのです。)
「お父様。どうしたらよいのですか。動いてもよいのですか。癒してもよいのですか」。イエス様は、絶えずこの態度をとられたのです。何でも知っておられて、何でもお出来になるお方にとって、考えられない態度でした。

ご自分を全く無にしてくださったのは、イエス様おひとりだけです。どうしてなのでしょう。コリント第二の手紙 8 章 9 節に、その答えが書かれています。

コリント人への手紙・第二 8 章 9 節

あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。

「イエス様の貧しさ」とは、どういうことであったかと言いますと、結局、「自分では何も出来ない。何もしたくない」と。イエス様は、「わたしは父から離れたら何も出来ない。何もしたくない」とおっしゃいました。このイエス様に似た者となることこそ、大切なのではないのでしょうか。

ですから、イエス様は、「わたしはぶどうの木であり、あなたがたはその枝です」と。つながっていれば、結び付けられていれば、OK。そうでなければ、全部むなしく、的外れです。

天国の栄光をお持ちになられたイエス様は、人間とともに、悪魔の奴隷とともに生活するようになられたのです。これもやはり、苦しくて、苦しくて仕方がなかったでしょう。イエス様のお気持ちが分かった人はいませんでした。ひとりも。弟子たちでさえ、イエス様をご自分の十字架の死についてお話しになったとき、彼らは裏で奔走して、自分たちの中でだれが一番偉いかと話し合っている状態でした。結局、人間は自分のことしか考えません。「嘘つき、偽善者です」と、イエス様は毎日経験なさらなければなりません。

ですから、弟子たちを残しておひとりになられたのです。ひとりで山へ上って、一晩中祈られました。父なる神と話すことがおできになるのは、イエス様にとってすべてでした。唯一の喜び、励まされたのです。

イエス様は、私たちのために本当に貧しくなられました。私たちが「キリストの貧しさによって富む者となるため」です。もしイエス様が十字架の上で死ななくても、ご自分が人間になれることは、考えられないほど大きな犠牲です。

イエス様はなぜ人間になられたのでしょうか。もちろん仕えられるためではありません。仕えられる権利をもちろんもっておいでになったのですけれど、「わたしは大切ではない。人間ひとりひとりが永遠に幸せになって欲しいから、わたしはどうでもよいのです」と。

マタイの福音書 20 章 28 節

「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

とあります。つまり、イエス様は仕えるために来られたのです。

人間はあまり仕えたくありませんし、無視されたら良い気持ちがしません。イエス様は、仕えるために来られたのです。どのようにそれが明らかになったかと言いますと、ご自分のいのちを贖いの代価としてお与えになることによってです。

人間は仕えてもらいたい気持ちがあります。イエス様はそういう気持ちをおもちになりません。人間には想像することも理解することも出来ませんが、天国で、イエス様は私たちに給仕してくださると聖書は語っているのです。考えられません。天国でもイエス様は私たちに仕えたいと。もし天国で穴があれば、みな姿を消すでしょう。(恥ずかしくて。) イエス様に給仕をしていただけるような、私たちはそのような価値はない者です。

どうしてか、なぜか分かりませんが、イエス様は仕える者になりました。そして、昨日も今日もいつまでも、その態度をおとりになるお方なのです。

ヨハネ伝 13 章の中に、次のような記事があります。

ヨハネの福音書 13 章 4 節、5 節

夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水を入れ、弟子たちの足を洗って、腰にまどっておられる手ぬぐいで、ふき始められた。

ペテロはちょっと反発したのですが、ほかの弟子たちももちろん同じ気持ちだったでしょう。ペテロの気持ちも分かります。「イエス様、いったい何をなさるおつもりですか。笑い話ではないですか。イエス様、やめてください」。しかしイエス様はそうなさったのです。常識ですと、人はそのようなことをしなかったのです。当時はお客様が来ると、足を洗ってあげる、そういう習慣があったのですが、それはいつも奴隷のする仕事でした。イエス様は、喜んで奴隷の仕事をしてくださったのです。天のすべての栄光をお持ちになられたイエス様が、仕える者となりました。

もう一箇所読みます。マタイ伝 15 章です。(聖書を知らない人たちは、この箇所を読むとつまずきやすいのです。) イエスとはいったいどういうお方か、という気持ちになるのではないのでしょうか。冷たい、分からない、理解できない、と。

マタイの福音書 15 章 21 節、22 節

それから、イエスはそこを去って、ツロとシドンの地方に立ちのかれた。すると、その地方のカナン人の女が出て来て、叫び声をあげて言った。「主よ。ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が、ひどく悪霊に取りつかれているのです。」

「ダビデの子よ。あわれんでください」。すごい祈りです。みこころにかなう祈りです。

マタイの福音書 15 章 23 節前半

しかし、イエスは彼女に一言もお答えにならなかった。

彼女は無視されたようです。イエス様は聞く耳を持っておられなかったようです。そこで、弟子たちは言ったのです。

マタイの福音書 15 章 23 節後半

そこで、弟子たちはみもとに来て、「あの女を帰してやってください。叫びながらあとについて来るのです。」と言ってイエスに願った。

「あの女を帰してやってください」。ひどいことばです。イエス様に頼みました。

マタイの福音書 15章24節から27節前半

しかし、イエスは答えて、「わたしは、イスラエルの家の滅びた羊以外のところには遣わされていません。」と言われた。しかし、その女は来て、イエスの前にひれ伏して、「主よ。私をお助けください。」と言った。すると、イエスは答えて、「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのはよくないことです。」と言われた。しかし、女は言った。「主よ。そのとおりです」。

「主よ。あなたの言われているとおり、私は汚れた犬のような者です。大切にされなくてもいいような者です。あなたの言われたとおりです」。

マタイの福音書 15章27節後半、28節

「ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパンくずはいただきます。」そのとき、イエスは彼女に答えて言われた。「ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。」すると、彼女の娘はその時から直った。

イエス様はきっと嬉しくなられたでしょう。

「子どもたちのパンを取り上げ、小犬に投げてやるのはよくない」とイエス様は言われました。この女は、ユダヤ人（つまり選ばれた民）に属していなかったカナン人の女性でした。異邦人でした。そして、イエス様の話によると、ユダヤ人は子どもであり、異邦人は犬のように汚れた者です。イスラエルの民は主なる神によって選ばれた民であり、ほかの国々は異邦人であり、犬と同じような者です。原語を見ると、もっと強いことばが使われています。「捨てられた犬」。「追い出された犬」と。

もちろん聖書は、イエス様が異邦人のためにも死なれたと記しています。捨てられた、追い出された犬のような者のためにも、父の言われたとおりに、死なれたのです。

追い出された、捨てられた犬は、もちろん誰にも属していませんし、自分の家を持っていません。イエス様の生活も、そのようなものだったのではないのでしょうか。イエス様は正直に言われたのです。

マタイの福音書 8章20節

…「狐には穴があり、空の鳥には巢があるが、人の子には枕する所也没有。」

乞食の乞食でした。イエス様は殴られ、虐待され、最後に十字架につけられてしまったのです。私たちのために。

コリント第二の手紙5章21節は、（この一節も読みましたけれど）ピンと来ないし、分かりません。けれども、天国へ行ってから必ず分かるようになります。

コリント人への手紙・第二 5章21節前半

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。

罪を知らないお方は、イエス様だけです。神は、罪を知らない、罪を犯す可能性を持っておられなかったイエス様を、私たちの代わりに罪とされました。

意味は、すべての人間のすべての罪過ちを、イエス様はただひとりで犯した者とされてしまいました。もう永遠なる神ではありません。愛されている御子でもありません。罪のかたまりになられました。

ですから、イエス様は、十字架の上で、地獄の地獄を経験されたのでしょうか。「我が神、我が神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」。イエス様は見捨てられました。祈っても応えがありません。

この父の沈黙とは、イエス様にとって考えられない苦しみだったに違いありません。けれども、「人間の永遠の幸せのためだったら…。わたしの思いではなく、お父様、みこころだけなるように」。

イエス様はこのような態度をおとりになられましたので、私たちは今日、このように喜ぶことができるのではないのでしょうか。

「イエス様は私のために死なれた」と本当に素直に信じ、受け入れる人は幸せです。幸いです。

了